

加藤 和子¹, 百瀬由美子²

A Study of Nursing Student's Attitudes toward Life and Death in Nursing Education

Kazuko Kato¹, Yumiko Momose²

本研究は看護学生の死生観や終末期ケアについての考え方とそれに影響する要因を把握し、死生観を形成するための教育のあり方を検討することが目的である。対象者はH看護専門学校に在学の1年生と3年生の218名であり、基本属性、死別体験の有無、死生観尺度等からなる質問紙調査を行った。回答が得られた学生208名(回収率95.4%)を統計ソフトSPSS15.0Jを使用して分析した。その結果、死生観は『生からの逃避志向』『死後の世界観』『望む死の迎え方と家族との絆』『望まない死の迎え方への期待』『死への不安』『肯定的な死を見出すことへの困難感』の6因子から構成されていた。また、死生観と学年、宗教、死別経験による有意差は認められず、死や終末期ケアについて考えたきっかけに講義や臨地実習をあげたものは1年生よりも3年生で有意に多かった。講義や臨地実習の中で経験したことや死や終末期ケアについて考えたことを真剣に討議させる機会をもつことと死を否定的側面だけでなく肯定的に捉えることができる死生観を醸成していくことが必要であることが示唆された。

キーワード：看護学生、死生観、看護教育

I. はじめに

わが国において、人口の高齢化に伴い65歳以上の高齢者の全死亡者数に占める比率は年々増加している¹⁾。このことから、看護職者は高齢者の死に直面する機会が増加していくと予測される。しかし、核家族の増加や病院で死を迎えることが多くなり、死を身近なものとして経験できる機会が減少している。そのため、看護職者は死を迎えようとしている患者に対して、どのように援助していくか戸惑い、患者と関わることに不安を感じていることが多い²⁾。山本は、他者の死に直面した場面で、どう受け止めてよいかかわからず、混乱に陥ったり燃え尽き状況になる要因として看護職者の死生観の未成熟を指摘している³⁾。また岡本らは、終末期患者と向き合い最期の時を支えるためには死生観を持つことが必要であると述べている⁴⁾。看護学生(以下学生)に対しても、自分の死に

する死生観を確立するとともに、患者の死を支えることができる死生観を形成することが必要であり、そのための看護教育が重要である。また、終末期患者が死をどのように受け止め、どのような死を迎えたいのか、という患者自身の死生観を理解することが重要である。

学生の死生観に関する研究は、看護学生と一般大学生の死生観を比較した研究⁵⁾や死生観の育成に関する調査⁶⁾などが行われてきている。しかし、患者自身と学生の死生観を比較した研究はされていない。また、死生観に影響する要因については、学年、読書、映画などによる影響を受けているという報告はあるが⁷⁾、十分に明らかにされていない。さらに、死生観を形成するための教育にどのように活用していくか、検討されていない。

そこで本研究では、学生の死生観や終末期ケアについての考え方とそれに影響する要因を把握し、死生観を形成するための教育のあり方を検討することを目的とした。また、高齢者が死をどのように受け止めどのような死を

¹愛知県立総合看護専門学校、²愛知県立大学看護学部(老年看護学)

迎えたいのか、という先行研究による高齢者自身の死生観と学生の死生観を比較し、死生観を形成するための教育のあり方を考察することを目的とした。

II. 用語の定義

死生観とは生きる意味と生の延長線上にある死についての価値観や考え方をいう。

III. 研究目的

1. 学生の死生観や終末期ケアについての考え方とそれに影響する要因を把握し、死生観を形成するための教育のあり方を検討することを目的とした。
2. 学生の死生観と高齢者の死生観を先行研究の結果から比較し、死生観を形成するための教育のあり方を考察することを目的とした。

IV. 研究方法

1. 調査対象と時期

調査対象者は、H看護専門学校に在学の学生で研究に同意を得られた者とした。先行研究によれば、死生観は講義や実習による影響を受けているという報告があり⁸⁾、学年による変化をみることにより、どのようなタイミングでどのような教育が必要かを検討することができる考えた。そのため、一部の看護専門科目の講義と臨地実習としては基礎看護実習のみを履修した1年生と、講義や臨地実習など全ての学習を終了した3年生を調査対象者とした。調査時期は、1年生は老年看護学概論、基礎看護学実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの履修した平成21年3月、3年生は講義と臨地実習を全て履修した平成20年12月に調査を実施した。

2. 調査内容

調査内容は死生観尺度の測定と死別経験の有無、死や終末期ケアを考えたきっかけ、高齢者の終末期ケアについて問う項目からなる質問紙を用いて実施した。

学生の死生観はGesserらが開発した信頼性・妥当性が検証されている死に対する態度尺度(DAP; Death Attitude Profile)を参考にして試作した横山の日本人高齢者死生観尺度⁹⁾を使用して測定した。

Gesserらの死に対する態度尺度は「死の受容」「積極

的受容」「回避的受容」「中立的受容」の4因子、21項目から構成されている尺度で、特に生への諦めとしての死を捉える観点が含まれている。横山の死生観尺度は、「死の受容」「積極的受容」「回避的受容」「中立的受容」の観点に日本の文化的背景と高齢者という年齢要因を考慮して「死後の世界観」「理想の死」の概念が加えられた6因子、26項目から構成されている。そのため、死に対する恐怖や不安という観点だけでなく、「死後の世界観」「理想の死」の観点から死生観を捉えることができる。また高齢者を対象として試作されたため、高齢者の観点との相違および類似性を検討できると考え、本尺度を用いることとした。

尺度の各質問項目に対する回答は「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」「まあそう思う」「そう思う」の5件法である。

3. 分析方法

- 1) 記述統計により対象者の特徴を把握した。
- 2) 死生観尺度の単純集計と回答分布より死生観の特徴を把握した。
- 3) 学年と死や終末期ケアを考えたきっかけとの関係については、 χ^2 検定を行った。
- 4) 死生観尺度の因子分析(最尤法, Promax回転)により学生の死生観の下位概念を抽出した。因子の抽出は、固有値1以上を基準とし、どの因子にも0.4以下の低い因子負荷量を持つ項目を削除し、分析を繰り返した。また、尺度の信頼性はCronbachの α 係数を算出し検討した。
- 5) 学年別、宗教の有無、死別経験の有無、死や終末期ケアを考えた経験の有無による死生観の下位尺度得点との比較はt検定により検討した。
- 6) 分析は統計解析ソフトSPSS15.0Jを使用した。

4. 倫理的配慮

調査の実施に先立ち、教育機関の学校長に研究の目的と意義、研究内容について文書および口頭で説明し承諾を得た。学生に対しては授業時間外に研究の趣旨を説明した。学生の参加を強制しないように調査への参加は自由であること、成績とは無関係であること、質問紙は無記名とし個人が特定されないこと、得られたデータは研究以外に使用しないことを文書および口頭で説明した。質問紙は厳封にて回収箱に投入していただくよう依頼し、回収箱は紛失防止の安全性に配慮し教務事務に設置した。

質問紙の提出をもって同意の確認とすることを説明した。

V. 結 果

配布数218部に対し回収数は208部で回収率は95.4%であった。回収された回答には欠損データはなく、すべてが有効回答であり分析対象とした。

1. 対象者の概要 (表1)

1) 対象者の属性

対象者は1年生116名 (55.8%), 3年生92名 (44.2%) で性別は男性13名 (6.2%), 女性は195名 (93.8%) であった。年齢は18歳から48歳で、平均年齢が22.1歳であった。結婚歴では未婚が最も多く190名 (91.3%), 既婚12名 (5.8%), 離別6名 (2.9%) であり、家族構成については家族と同居している179名 (86.1%), 1人暮らし29名

表1 対象者の概要

N=208

1. 対象者の属性			
学年	1年生	116名	55.8%
	3年生	92名	44.2%
性別	男性	13名	6.2%
	女性	195名	93.8%
年齢	平均	22.1歳 (SD=5.38)	
	範囲	18~48歳	
結婚歴	未婚	190名	91.3%
	既婚	12名	5.8%
	死別	なし	0.0%
	離別	6名	2.9%
家族構成	同居	179名	86.1%
	1人暮らし	29名	13.9%
信仰	あり	37名	17.8%
	なし	171名	82.2%
2. 死別経験と終末期ケアの考えた経験			
死別経験	あり	166名	79.8%
	なし	42名	20.2%
死別者との関係 (複数回答)	親	9名	4.3%
	祖父母	131名	62.9%
	兄弟	1名	0.5%
	親しい友人	29名	13.9%
	受持ち患者	10名	4.8%
	その他	35名	16.8%
死や終末期ケアを考えた経験	あり	184名	88.5%
	なし	24名	11.5%
死や終末期ケアを考えたきっかけ (複数回答)	死別の経験	99名	47.6%
	講義や臨地実習	90名	43.2%
	セミナーや学習会	3名	1.4%
	テレビや映画	85名	40.9%
	介護や看取りの経験	28名	13.5%
	その他	7名	3.3%
3. 「高齢者」の終末期ケアへの関心			
関心	あり	106名	51.0%
	なし	7名	3.4%
	どちらともいえない	95名	45.6%

(13.9%)であった。信仰については信仰あり37名(17.8%), 信仰なし171名(82.2%)であった。

2) 死別経験と死や終末期ケアを考えたきっかけ

死別経験については、あり166名(79.8%), なし42名(20.2%)で複数回答による死別者との関係からみると、最も多いのが祖父母131名(62.9%)で次いで親しい友人29名(13.9%), 受持ち患者10名(4.8%), 親9名(4.3%), その他35名(16.8%)であった。死や終末期ケアについて考えた経験のある学生は184名(88.5%), なし24名(11.5%)で、複数回答による考えたきっかけとなったものには、死別の経験99名(47.6%), 講義や臨地実習90名(43.2%), テレビや映画85名(40.9%), 介護や看取りの経験28名(13.5%)であった。セミナーや学習会がきっかけで考えた学生は3名(1.4%)と少なかった。また、高齢者の終末期ケアへの関心については、関心あり106名(51.0%), なし7名(3.4%), どちらともいえない95名(45.6%)であった。

学年と死や終末期ケアを考えたきっかけとの関係(表2)をみると、講義や臨地実習で考えたきっかけになった学生は1年生35名(38.9%), 3年生は55名(61.1%)と1年生よりも3年生で有意に多かった($p < 0.001$)。死別の経験、テレビや映画、介護や看取りの経験について有意差は認められなかった。

2. 死生観尺度の単純集計と回答分布(図1)

死生観尺度の26項目について、「そう思う」「まあそう思う」を合計した項目でみると「思い残すことがない状況で最期を迎えたい」91.3%, 「家族や親しい人に囲まれて天寿を全うしたい」80.2%, 「苦しみながら死にたくない

い」94.2%, 「長い間寝たきりで死んでいくのはいやだ」89.5%, 「周囲に迷惑をかけて死にたくない」91.8%の項目が8割を超える高い率の回答であった。

「そう思わない」「あまりそう思わない」を合計した項目は「死は別にどうでもいいことだ」81.7%, 「この世に期待するものは何もないと思う」82.2%, 「生きることについてうんざりしている」78.4%の項目が約8割を占める回答であった。

3. 死生観尺度の因子分析

死生観尺度26項目に対して固有値を1以上とし最尤法、Promax回転による因子分析を行った。因子負荷量が0.4以上の項目を選択し因子分析を繰り返した結果、18項目6因子が抽出された。死生観尺度の因子パターンと因子間相関を表3に示した。また、6因子による累積説明率は51.2%であった。

第1因子は「生きることについてうんざりしている」「この世に期待するものは何もないと思う」「死ぬことで人生の重荷から救われると思う」「人が死んだら無になると思う」の4項目で構成されており、死ぬことにより今の苦しみから救われることや生きていることに諦め、逃避的な認識を表す内容の項目に高い負荷量を示しているため『生からの逃避志向』と命名した。

第2因子は「死後の世界はあると思う」「人が死んだら生まれ変わると思う」「死後の世界を楽しみにしている」「死は永遠の幸福な場所への道だと思ふ」の4項目から構成されており、死後の世界についての思いをうかがわせる内容の項目に高い負荷量を示しているため『死後の世界観』と命名した。

第3因子は「思い残すことがない状況で最期を迎えた

表2 学年と終末期ケアを考えたきっかけとの関係

項目	学年		合計	X ² 値	P値
	1年生	3年生			
死別の経験	61名 61.6%	38名 38.4%	99名 100.0%	2.185	0.125
講義や臨地実習	35名 38.9%	55名 61.1%	90名 100.0%	18.32	0.001
テレビや映画	49名 57.6%	36名 42.4%	85名 100.0%	0.205	0.672
介護や看取りの経験	15名 53.6%	13名 46.4%	28名 100.0%	0.02	0.840

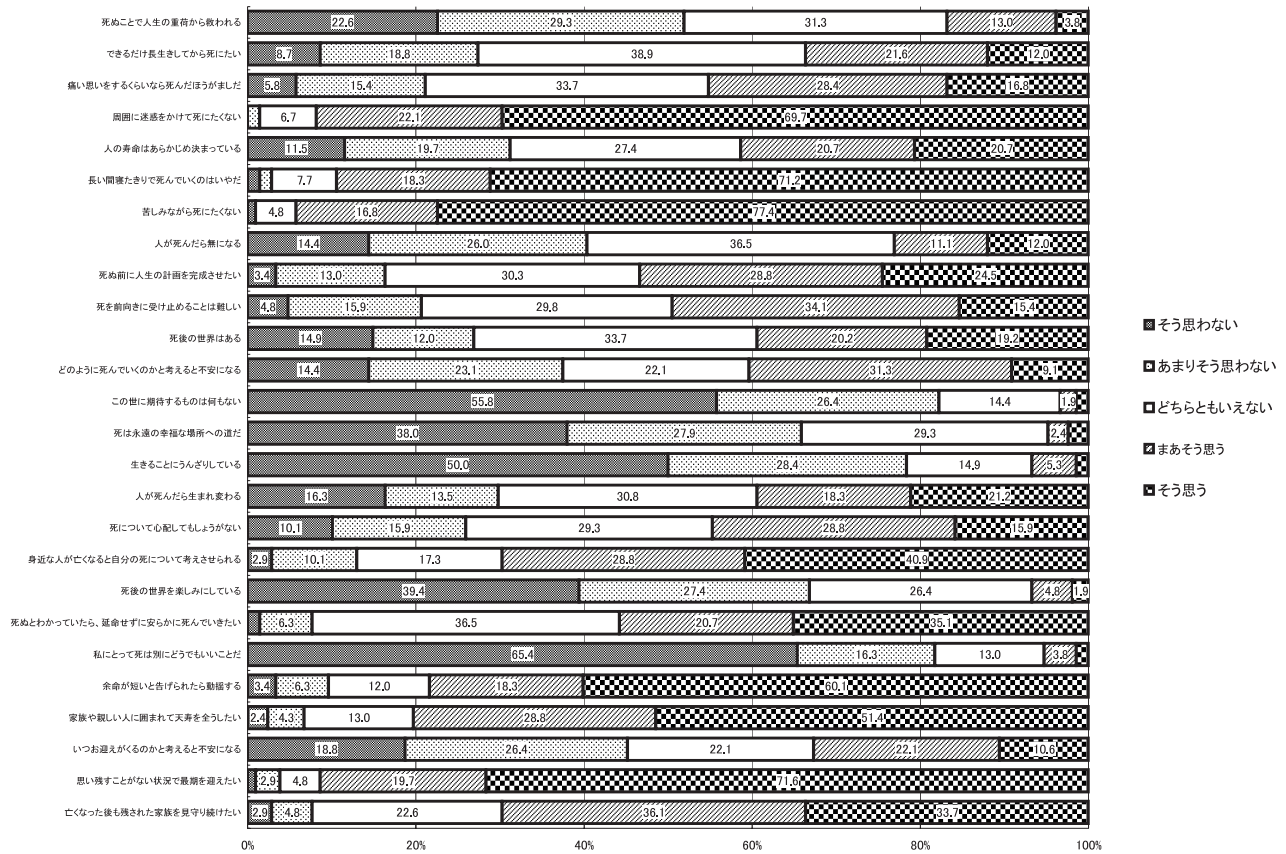


図1 死生観尺度回答分布

い」「家族や親しい人に囲まれて天寿を全うしたい」「余命が短いと告げられたら動揺する」「亡くなった後も残された家族を見守り続けたいと思う」の4項目から構成されており、望む死の迎え方として家族との絆を大切にしながら死を迎えたいという内容の項目に高い負荷量を示していた。また、「余命が短いと告げられたら動揺する」の項目については、家族との絆を大切にしながら、死を迎えたいという望みがあるからこそ、望む死の迎え方として準備が整っていない状況で命が短いと告げられた場合は動揺を隠せない状況が考えられ、望む死のあり方は家族との絆に関連した内容であると解釈し『望む死の迎え方と家族との絆』と命名した。

第4因子は「長い間寝たきりで死んでいくのはいやだ」「苦しみながら死にたくない」「周囲に迷惑をかけて死にたくない」の3項目から構成されており、寝たきりや苦しむことなく、周囲に迷惑かけてまで生きることを望まないという内容の項目に高い負荷量を示しているため『望まない死の迎え方への期待』と命名した。

第5因子は「いつお迎えがくるのかと考えると不安に

なる」「どのように死んでいくのかと考えると不安になる」の2項目から構成されており、死の訪れやどのように死んでいくか考えると不安であるという内容の項目に高い負荷量を示しているため『死への不安』と命名した。

第6因子は「死を前向きに受け止めることは難しいと思う」の1項目で構成されており、肯定的に死を受け止めることが困難であるという内容であり、『肯定的な死を見出すことへの困難感』と命名した。

Cronbachのα係数は第1因子が0.734、第2因子が0.724、第5因子が0.734であったが、第3因子0.684、第4因子は0.673であり、0.7を下回った。しかし、いずれも0.65以上であり、意味内容から考え内的整合性は許容範囲内であるととらえ、死生観を構成する因子と他の要因との検討することとした。

4. 死生観に影響する要因

学年別、宗教の有無、死別経験の有無、死や終末期ケアを考えた経験の有無と死生観の下位尺度得点をt検定により比較をした結果、全てにおいて有意差はみられな

表3 死生観尺度の因子パターンと因子間相関(最尤法 Promax回転)

項 目	因 子					
	I	II	III	IV	V	VI
第1因子：生からの逃避志向 ($\alpha=0.734$)						
Q12 生きることによってうんざりしている	0.863	0.023	0.015	-0.028	-0.015	0.038
Q14 この世に期待するものは何もないと思う	0.750	0.067	-0.118	-0.005	0.001	0.054
Q26 死ぬことで人生の重荷から救われると思う	0.597	0.071	0.151	-0.039	-0.010	0.024
Q19 人が死んだら無になると思う	0.417	-0.353	-0.064	0.054	0.061	0.228
第2因子：死後の世界観 ($\alpha=0.724$)						
Q16 死後の世界はあると思う	-0.061	0.935	-0.078	-0.063	-0.002	0.250
Q11 人が死んだら生まれ変わると思う	-0.063	0.619	0.126	0.086	-0.010	0.037
Q8 死後の世界を楽しみにしている	0.186	0.527	0.020	0.031	0.004	-0.150
Q13 死は永遠の幸福な場所への道だと思ふ	0.215	0.443	0.027	0.018	0.052	-0.164
第3因子：望む死の迎え方と家族との絆 ($\alpha=0.684$)						
Q2 思い残すことがない状況で最期を迎えたい	0.132	0.030	0.684	0.205	-0.062	0.002
Q4 家族や親しい人に囲まれて天寿を全うしたい	-0.045	0.034	0.573	-0.020	0.128	0.107
Q5 余命が短いと告げられたら動揺する	-0.265	-0.077	0.567	-0.069	-0.044	0.128
Q1 亡くなった後も残された家族を見守り続けたいと思う	0.098	0.095	0.494	-0.076	0.107	-0.176
第4因子：望まない死の迎え方への期待 ($\alpha=0.673$)						
Q21 長い間寝たきりで死んでいくのはいやだ	-0.117	0.054	-0.180	0.930	0.074	0.033
Q20 苦しみながら死にたくない	0.002	-0.102	0.219	0.560	0.068	0.016
Q23 周囲に迷惑をかけて死にたくない	0.084	-0.087	0.123	0.488	-0.186	-0.076
第5因子：死への不安 ($\alpha=0.734$)						
Q3 いつお迎えがくるのかと考えると不安になる	-0.033	0.040	0.014	-0.015	0.994	-0.062
Q15 どのように死んでいくのかと考えると不安になる	0.033	-0.030	0.080	0.022	0.539	0.123
第6因子：肯定的な死を見出すことへの困難感						
Q17 死を前向きに受け止めることは難しいと思う	0.118	0.018	0.024	-0.006	0.033	0.709
因子間相関						
I	-	-0.024	-0.412	0.119	-0.223	-0.137
II		-	0.270	0.020	0.097	-0.126
III			-	0.091	0.405	0.167
IV				-	-0.016	0.079
V					-	0.248
VI						-

かった。しかし、学年別に各因子の下位尺度得点の平均値をみると、『望まない死の迎え方への期待』は1年生10.6±1.4、3年生11.0±1.3であり、3年生が『望まない死の迎え方への期待』を強く思っている傾向がうかがえた。

VI. 考 察

1. 学生の死生観

死生観尺度の回答分布では、「思い残すことがない状況で最期を迎えたい」「家族や親しい人に囲まれて天寿を全うしたい」「苦しみながら死にたくない」「長い間寝たきりで死んでいくのはいやだ」「周囲に迷惑をかけて

死にたくない」の項目でそう思う、まあそう思う学生が8割を超えていた。学生は身体的には苦痛のない状態で、周囲に迷惑かけることなく、家族等に囲まれながら死を迎えたいということを望んでいることがわかった。学生に対する死生観尺度の因子分析からは、『生からの逃避志向』、『死後の世界観』、『望む死の迎え方と家族との絆』、『望まない死の迎え方への期待』、『死への不安』、『肯定的な死を見出すことへの困難感』の6因子から構成されていた。

これらのことから学生の死生観の特徴として、学生自身が望む死の迎え方は家族に見守られながら思い残すことがない状態で死を迎えたいという『望む死の迎え方と家族との絆』が示されていると解釈できる。その一方で

長い間寝たきりや苦しみながら死にたくない、周囲に迷惑をかけて死にたくないという『望まない死の迎え方への期待』も示している。特に1年生より講義や臨地実習が多い3年生が『望まない死の迎え方への期待』を強く思っている傾向がみられたことは、実際の患者と関わることにより死の否定的側面のイメージを強く感じているのではないかと考えられる。また、肯定的に死を受け止めることが困難であるという思いを表している『肯定的な死を見出すことへの困難感』としての死生観も示された。岡本らは、死の否定的側面だけでなく、よりよく生きるという死を肯定的側面から捉えるという「死への準備教育」と、意思疎通ができない状態でも生きていることが大切であるという「身体と精神の死」を指摘している⁹⁾。このように、今後望まない状態であっても生きていることの大切さや意味を考えさせ、死を否定的側面だけでなく肯定的に捉えることができる死生観を醸成していくための教育が必要であると考えられる。

2. 学生の死生観に影響する要因

本研究では、学年別、宗教の有無、死別経験の有無、死や終末期ケアを考えた経験の有無と死生観の下位尺度得点とは、全てにおいて有意差はみられなかった。

死別経験からみると、死別経験がある学生が約8割であり、祖父母が6割で最も多かった。しかし死生観と死別経験による有意差は認められなかったことから死別経験が直接死生観に影響しているとはいえないことがわかった。園田らは死別や看取り経験は祖父母が大部分であり、身近な人との経験が学生の死生観の育成とは結びつかないことを指摘し、死生観の醸成には死別経験の有無ではなく、生や死について真剣に討議することが教育として必要であると述べている¹⁰⁾。

また約9割が死や終末期ケアについて考えたことがあり、考えたきっかけとなったものとして、死別の経験、講義や臨地実習、テレビや映画が約4割を占めていた。特に講義や臨地実習をあげたものは、1年生より3年生で有意に多かった。田代らは死生観に影響を与えた要因として臨地実習をあげ、学年が上がるにつれて、死生観に影響を与えた実習の体験が増加していることを指摘している⁸⁾。

このことから、死や終末期ケアについて考えるきっかけが多くなる講義や臨地実習の中で経験したことや、死や終末期ケアについて考えたことを真剣に討議させる機会をもつことが死生観を形成させるために必要な教育で

あると推察される。

3. 学生の死生観と高齢者の死生観の相違

学生は、「死は別にどうでもいいことだ」「この世に期待するものは何もないと思う」「生きることにうんざりしている」の項目でそう思わない、あまりそう思わない学生が約8割を占め、死や生に対して否定したり逃避的に捉えていないことがわかった。高齢者の死生観は先行研究によれば、死が近いと思うことによる不安・動揺をするという「死と不安と否認」、死んだら生まれ変わるといふ「死後の世界」、死は別にどうでもいいことだ、痛い思いをするなら死んだほうがましだという死に対する「無関心・逃避」が示されていた。このことから、学生の死生観と高齢者の死生観には相違があることがうかがえる。そのため、学生と高齢者の死生観の相違があることを理解させ、看護する対象である高齢者の理解を促す教育が必要である。

4. 看護教育の実践への示唆

- 1) 死の迎え方については、生きていることの大切さや意味を考えさせ、死を否定的側面だけでなく肯定的に捉えることができる死生観を醸成させていくことが必要である。
- 2) 死や終末期ケアについて考えるきっかけが多くなる講義や臨地実習の中で経験したことや死や、終末期ケアについて考えたことを真剣に討議させる機会をもつことが死生観を醸成させるために必要な教育である。
- 3) 学生と高齢者による死生観の相違を理解させ、看護する対象である高齢者の理解を促す教育が必要である。

VII. 結 論

学生の死生観を調査し以下の結果を得た。

1. 死生観と学年別、宗教の有無、死別経験有無、死や終末期ケアを考えた経験による有意差は認められなかった。
2. 学年と終末期ケアを考えたきっかけとの関係は、死別の経験、テレビや映画、介護や看取りの経験について有意差は認められなかった。しかし、終末期ケアを考えたきっかけに講義や臨地実習をあげたものは、1年生よりも3年生で有意に多かった。
3. 死生観は『生からの逃避志向』『死後の世界観』『望む死の迎え方と家族との絆』『望まない死の迎え方へ

の期待』『死への不安』『肯定的な死を見出すことへの困難感』の6因子から構成されていた。

4. 学生の死生観の特徴として、家族に見守られながら死を迎えたいという望む死の迎え方と望まない死の迎え方を示していた。
5. 先行研究では、高齢者はどのような死に方をしたいのかというより、死は別にどうでもいいことだ、痛い思いをするなら死んだほうがましだなど、死に関して「無関心・逃避」する傾向がみられたが、本研究では、学生は死や生に対して否定したり逃避的に捉えていない傾向がみられ、高齢者と学生の死生観の相違がみられた。

以上のことから、死や終末期ケアについて考えるきっかけが多くなる講義や臨地実習の中で経験したことや死や終末期ケアについて考えたことを真剣に討議させる機会をもつことが必要である。そして、生きていることの大切さや意味を考えさせ、死を否定的側面だけでなく肯定的に捉えることができる死生観を醸成していくことが必要である。さらに学生と高齢者の死生観の相違を理解させ、看護する対象である高齢者を理解させる教育が必要であることが示唆された。

謝 辞

本研究を行うにあたりまして、ご協力いただきましたH看護専門学校の皆さまに、心よりお礼を申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省：人口統計高齢者の死亡者数. 2006.
- 2) 大山由起子：看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究. 第34回日本看護学会論文集（看護総合）：77, 2003.
- 3) 山本俊一：死生学のすすめ. pp. 29-32, 医学書院, 1992.
- 4) 岡本双美子, 石井京子：看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因. 日本看護研究学会誌, 28(4)：53-60, 2005.
- 5) 糸島陽子：死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較—. 京都市立看護短期大学紀要, 30：141-147, 2005.
- 6) 前澤美代子, 仲沢富枝：看護学生の死生観育成. 山梨県立看護短期大学部紀要, 12(1)：1-14, 2007.
- 7) 石田順子, 石田和子, 神田清子：看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要：18, 109-114, 2007.
- 8) 田代隆良, 永田奏, 出田順子, 安藤悦子：看護学生の死生観の学年間比較. 保健学研究, 19(1)：43-48, 2006.
- 9) 横山弘美：老人クラブ員におけるAdvance directives賛否の影響要因. 愛知県立看護大学大学院修士論文：29, 2008.
- 10) 園田麻利子, 上原充世：ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要：11, 21-35, 2007.